

前号に引き続き「金州」について紹介したい。

金州城については、約100年前に発行された書物(明治・大正の旅行シリーズ17)に次のように書かれている。

〈明の洪武年間(約530年前)古城を修め衛城と為してより爾後久しく倭寇防備の首城たりしが、今の城郭は清朝乾隆39年^{注1)}(約144年前)の重修に係り、周囲三十余町^{注2)}四方各一門を通ず。過る二大戦役に際し、此の城亦我軍攻撃目標の一たりしかば、当時の惨劇を偲ぶべきもの尠からず〉

さらに人口は当時約9千人であった。また文中、〈当時の大砲などを撃ち合った惨劇の跡は少なからず〉あったと書かれているが、今ではその跡はほとんど見当たらず、前号に書いた「金州博物館」に行かなければ往時は偲べない。この城が倭寇防備の城でもあったとは思ひもよらなかった。考えてみれば、朝鮮半島沿岸から渤海湾まで倭寇が荒らしまわったのであるからさもありなんと思う。

北門跡の石碑は見るができなかったので、次に北門跡から近い「金州副都統衙署」旧址に行った。〈衙〉という字は昔の役所のことである。この役所は前号ですこし触れたように清朝時代に海防のために1843年に設置された。この時代はアヘン戦争(1840年～42年)の直後であり、海防は喫緊の政策であった。5,940平方メートル(約

1800坪)の敷地に17棟の建物があるが、ほぼ完全な状態で保存されており貴重な遺産である。実は、敷地内に正岡子規の「行く春の酒をたまわる陣屋哉」句碑があるという話を聞いていたのでそれを探してみたが、見当たらなかった。これも後日、金州博物館に保管中ということが分かった。またもや石碑は空振りに終わってしまった。

さて、いつごろ子規(1867～1902)がここを訪れたのかを紐解いてみよう。正岡子規は、東京大学中退後叔父の紹介で1892年(明治25年)



正岡子規石碑 2002年撮影
(「ざったび」<http://zattabi.net>より転載)

に新聞「日本」の記者になった。1894年に日清戦争が勃発すると、幼馴染の秋山真之の海軍での活躍ぶり(子規没後の日露戦争では重責を担う)に刺激されたようで、従軍記者に志願して1895年4月に遼東半島に向かい金州に到着した。当時は大連はまだ農村である。しかし現地に着く直前の3月30日に下関で李鴻章が休戦条約に調印したことが到着して分かった。おそらくかなり落胆したであろうことは容易に

想像できる。5月半ばには帰国したのであるが、5月2日に彼を大変喜ばす出来事があった。旧松山藩主の久松定謨(ひさまつさだこと)がいて、宴を催し子規を招いて慰労したのである。感激した子規は、「日本」に連載した「陣中日記」にこの俳句を書いている。それを石に彫った句碑が衙署に設置されていたのであるが、写真で見れば立派なものである。句碑に関しては、第二次世界大戦

後、地元の中国人が中国共産党や文化大革命の嵐から守るため土中に埋めて隠しておいたという話がある。事実とすれば、地元の中国人に感謝したい。子規の詠んだ句としては平凡なものに属するかもしれないが、背景を知ると感慨も一入である。子規は帰国する船中で咯血し、病も重く松山に帰郷し以後闘病生活を送り、1902年に34歳の若さで逝ってしまった。

「金州副都統衙署」を後にして金州の中心部から北に車で15分くらい走ったところにある「石河烽火台」に向かった。烽火台は昔の戦争時に使う「のろし」を上げる台である。石河という所にある烽火台は明代(1368年～1644年)に造られているが、いつのころまで使われていたのであろう。グラハム・ベルが電話を発明したのが1876年であるから、比較的近代まで通信手段は「のろし」に頼っていたのではないか。石河の町に入り何人かの地元の人に聞いてみても皆知らない、との返事ばかり。2007年に遼寧省の文化財の保護指定となっているのに関心のある人はいないのか、と友人と途方に暮れた。看板の一つさえ見当たらない。そこに自転車に乗ったおじいさんが来たので聞くと、先程から何度か通っていた墓地の奥にあるという。「〇〇陵園」と書かれた立派な門があったので、ここにはないであろうと勝手に判断したのだ。早速その場所に行くと、遠くに写真で見た石垣が見えた。「石河烽火台」と案内板くらいなぜ作らないのかと文句を言いたくなる。ところがそこからが大変であった。100mほど坂道を登ったところから道がな

いのである。身の丈ほどの雑草が生い茂り、隙間から石垣が見えるが行けそうにもないので写真だけ撮ってあきらめることにした。烽火台は、周



革命家「関向応」像。後ろの建物は旧金州博物館 (Google Panoramioから転載)

囲34メートルの長方形で高さは4～5メートル程度と資料にはあった。次回来る機会があればよく切れる植木ばさみを持参しよう。

今回の金州訪問の報告は以上であるが、歴史の町、金州はほかにも見るべきところがいくつもある。一つだけ紹介すると、街の中心に馬に跨った人物の像がある。高さ2メートル位の石の台座の上にあるのでとても目立つのだ。この人物は

「関向応」(1902年～1946年)という。金州出身の革命家、政治家、軍事家である。一生を党と軍の重要指導職務を担当し、人民の解放事業に歴史的な貢献があったという。しかし長年苦勞したため早死にした。このとき毛沢東から言葉をもらったのであるが、台座に毛沢東の揮毫が次のように刻まれている。

〈忠心耿耿、為党為国、向応同志不死〉

本稿の終わりに「金州」という街の歴史をかい



金州副都統衙署の正門。筆者撮影

つまんで辿ってみたい。古くは戦国時代から秦の時代(BC475年～BC206年)にかけて遼東郡の管轄下に置かれた。その後、高句麗、遼(契丹族)、金(女真族)と次々に支配者が変わっていった。金州の名前が初めて登場するのは、「金」が支配していた1143年である。その当時の「化成県」を金州と改めた。その後も「金州街」や「金州庁」など幾度も名称が変わっている。そして日清・日露戦争を経て、日本とロシアに交互に支配された。第二次世界大戦後、1949年に中華人民共和国の領土になり今日に至っている。まことにめまぐるしい変遷であり、この地方に住む住民は2千年以上も歴史に翻弄されてきたと言えよう。

次になぜ「金」という国名になったのかをネットで見ると次のように書かれている。「金」はもともとは黒竜江省の大河「松花江」の支流の「按出虎水」の流域に住んでいたそうだが、この地から産出する砂金からこの名称を付けたとされているらしい。そこでなぜ「金州」という地名を付けた

のであろうか。ネットに書かれていないので大連に住んでいる中国人の大学教授に調べてもらった。数日後次のようなメールが送られてきた。人文学科史話叢書という書物にある唐の時代の伝説ですが、との前置きの後、〈唐の太宗が東征をした時、大黒山に登り周りの海を見渡して、この海は畑になればいいなあと思ひ金の矢を北側の海に射たところ、海水が引き本当に畑になったというのです。・・・「剣射金州」という伝説です〉と書かれていた。この伝説を見て、鎌倉時代新田義貞が稲村ヶ崎において黄金造りの太刀を海に投じたところ、みるみるうちに潮が引き始め海伝いに鎌倉に討ち入った故事を思い出した。次号は8月27日の長春の旅行を書いていきたい。

(続く)

■注

- 1) 乾隆39年は西暦1773年
- 2) 一町は約109m。したがって三十町は約3270mである。一辺が約800m²強の城壁に囲まれていたことになる。(前号の城の写真と平面図をご参照ください)